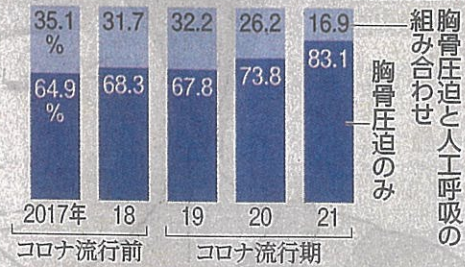


人工呼吸 コロナ禍で大幅減

子どもへの救命行動 岡山大が分析

小児の院外心停止で実施された心肺蘇生法



一方で人工呼吸は技術的にも心理的にもハードルが高く、ためらって

救えたはずの命も

研究グループでは、消防が管理する病院外での心停止事例のデータベースを利用し、17～21年に発生した17歳以下の小児の院外心停止7162例を解析。救急車が到着する前に市民が心肺蘇生を行ったケースは3352例あり、そのうち人工呼吸を含む心肺蘇生が施

感染恐れ 控える動き

子どもが水に溺れるなどして心停止したときに強く推奨されている人工呼吸と胸骨圧迫を組み合わせた蘇生法が、新型コロナウイルス感染症が拡大した2020、21年に大きく減少していたことが、岡山大の研究グループの分析で明らかになった。胸骨圧迫のみの蘇生法では死亡リスクが高まり、本来なら救えたはずの命を失っていた可能性もあるとしている。



小原隆史特任講師

された割合はコロナ流行前は3割を超えていた一方、コロナ禍の20年は26・2%に減少。21年は16・9%と2割を切るほど減った。人工呼吸の割合が低い傾向は22、23年も続いているという。

また、胸骨圧迫だけの心肺蘇生では、30日以内に死亡したり、後遺症が残ったりする傾向が顕著にあり、コロナ禍では年間10・7人の子どもの本来救えた可能性のある命を失っていたことが、統計的に推定されたとい

う。

研究を中心になって進めた岡山大の小原隆史特任講師は「特に、幼稚園や学校の先生、子育てをしている親御さんなど、子どもが身近にいる人々に、まずは人工呼吸の大切さを再認識してほしい。どうしても不安にして子どもを助けられる社会にできるのか、今回の研究が考えるきっかけになってほしい」と話している。

研究結果は国際的な学術誌「Resuscitation」に掲載された。(渡辺翔太郎)